



筑波大学名誉教授 村上和雄

村上和雄 —むらかみかずお  
昭和11年奈良県生まれ。38年京都大学大学院博士課程修了。53年筑波大学教授就任。遺伝子工学で世界をリードする第一人者。平成11年より現職。著書に「心の力」共著。致知出版社など多数。最新刊に「スイッチ・オンの生き方」(致知出版社)がある。

浪和36年神奈川県生まれ。44年に父の転勤で渡米。テキサス大学卒業。日本国際交流センターを経て、UCLAでMBA取得。ファースト・ボストン、JPMorgan、ゴールドマン・サックス、ムーア・キャピタル・マネジメント東京駐在員事務所設立を経て、平成13年シブサワ・アンド・カンパニー株式会社を創業。20年コモンズ投信を設立、会長に就任。著書に「巨人・渋沢栄一の「富」を築く100の教え」(講談社)などがある。

# 仁義道徳の基盤 なくして富の永続は ありえない

日本はいま、大きな転換期に差し掛かっている。強きもののみが生き残る世界から共生の世界へ、目に見えるものだけの世界観から精神的な世界観へ——。今回は渋沢栄一翁の子孫であり、投資会社を経営する渋澤健氏をお迎えし、渋沢家のDNA、そしていま我々が栄一翁から学ぶべきことなどお話しいただきました。

コモンズ投信会長 渋澤健



## いま世界から 注目される渋沢栄一

村上 いま渋沢栄一さんが中国で注目されているそうですね。あの日本嫌いの中国に「渋沢栄一研究センター」があると聞きました。  
渋澤 二、三年前に武漢の華中師範大学にできました。日本が大発展した明治の時代に渋沢栄一という人物が株式会社をたくさんつくったと。しかも「論語と算盤」といって、両方中国が発祥のものを大切にしてたというので、それに学ぼうという動きがあるようです。

村上 健さんはその渋沢栄一さんの孫の孫にあたるかと。  
渋澤 はい。私の祖父が栄一の三男の孫にあたります。

村上 偉大な人を祖先に持ったプレッシャーはありますか。  
渋澤 小学校二年から大学までアメリカで育っていますし、そのあともずっと外資系の金融機関に勤めていたので、ほとんど感じてこなかったですね。

村上 まあ、外国では家系なんかほとんど話題にもなりませんからね。ワシントン大統領の子孫なんだろうと。

ちやうどそんな時に村上先生の『生命の暗号』を読んだんです。これだ、と思いましたね。DNAスィッチがONになったりOFFになったりして、ONにしたいなら環境を変えなさいと。まさに私の長年の謎が解ける思いがして、非常に嬉しかったです。  
以来、いつかこの先生とお目にかかりたいなど、『致知』で毎号対談をされているので、自分もさせていきたいと思いますと思っていました。きょう実現して嬉しいです。サムシング・グレートが動いてくれたのかなと思っています。

## 総じて運と 生きる力が強かった

村上 ありがとうございます。  
私も健さんとの対談に備えて渋沢栄一さんに関する本を読ませてもらいましたが、株式会社を五百社起業するなど、あれほどのスケールの大きな人物になられたのは、やはりあの時代に外国へ行かれた経験が強烈だったのではないかと感じました。

渋澤 もともとは筋金入りの尊王攘夷派で、討幕のために高崎城の

て誰も知らない(笑)。  
渋澤 一方で幼少の頃に渡米しましたので、いわゆるアイデンティティー・クライシス——自分が日本人なのか、アメリカ人なのか、よく分からない時期が続きました。ただ働くようになってから、他の民族の人たちに、日本や日本人について説明しなければいけない立場になって、もっと日本のことを知らなければいけないという意識が非常に強まってきました。  
村上 そのあたりから自分は日本人だという自覚が生まれた。  
渋澤 そうですね。海外に暮らす日本人や外資系企業で働く日本人は、「日本人として頑張らなきゃダメだ」、そんな思いを持っている人が結構多いですよ。  
ただ、バブル崩壊後「失われた十年」といわれた時代に、日本人は農耕民族だからこうで、欧米人は狩猟民族だからこうだとか、DNAが違うというようなことが盛んに言われましたよね。私は両方を知っているからなんとなく腑に落ちなくて。だって人間とチンパンジーだってほとんどDNAは変わらないんですよ。人間は人間なんだから、そんなに違わないだ



乗っ取りや横浜の外国人居住地を焼き払おうと計画を立てていましたが、ある時、一橋慶喜の側近だった平岡四郎と知り合って一橋家の家来となりました。その後、慶喜が将軍となり、幕臣としてパリの博覧会に行つて、そこで株式会社を知るんです。

村上 討幕派だったのに、幕臣として渡航したというのは運命ですね。パリで株式会社を勉強したというのもすごい。

渋澤 はい。パリでは銀行家、日本では金貸し業が、軍人と同等なレベルで会話をしている、国の行く末を論じていることに大きな衝撃を受けたと思います。

また、幕府の視察団の会計係としてお金の管理をしていたのも天

の配剤ですね。現地の世話人から「お金は銀行に預けるより、公債か鉄道株を買ったほうが良い」と勧められ、言われるがままにそうしたわけです。

で、慶喜が大政奉還をしたために急遽帰国することになり、売り払った時に株が値上がりしていた。これがよかった。もし値下がりしていたら、「資本主義なんて博打だ」と言っていたに違いないですよ(笑)。

村上 そうしたら日本の資本主義の発達が遅れていたかもしれないですね(笑)。

渋澤 だからすぐく運が良かった人だと思えます。また、時代にも恵まれていました。あのまま封建時代が続いていたら、世に出るチャンスはなかったでしょうから。時代の転換期に、それなりに裕福な農家で育ち、商売の知識を持っていました。

村上 それがよくあったんでしょね。武士階級に生まれると武士の世界にどっぷりつかっていたかもしれない。

渋澤 栄一が生まれ育った深谷(埼玉県)は当時、新潟など日本海側から江戸への商業の流れがあったと思います。物の動きと一緒に情

報が常に流れてきますから、当時日本が外国人に乗っ取られてしまうといった情報が入ってきたのだと思います。

家を継ぐといったしがらみはあったようですが、栄一の父もリベラルというか、自分の好きにやれという人でした。時代に恵まれたし、家の環境も恵まれていたと、本人も書いています。

村上 それと幼少の頃から『論語』に親しんでおられたといえますね。渋澤 八歳の頃には漢籍に親しんでいた記録があります。

村上 普通の農家じゃないよね。やはりそういう下地があったから海外に行つて吸収できたんでしょ。また、海外に行かれた年齢もよかったと思うんです。もっと年を取っていたらあれだけ学んでこられたか。

渋澤 海外での日記を読んでみますと、バターやアイスクリームなどいろんな食べ物に挑戦しているんですね。一緒に行った人の中には拒否反応を示した人もいたと思います。だから好奇心が強くて、行動力もあつたのでしょう。総じて運が強く生きる力が強かつたと思います。

### 渋澤健の不都合な真実 から始まった栄一の研究

村上 運の強さといえば、あの時代で渋沢栄一は大変長生きをしましたよね。

渋澤 九十一歳まで生きました。城の乗っ取り計画や、海外渡航など、命を落としてもおかしくない場面はたくさんあつたと思うのですが、それだけ長生きをしたという一面だけでも運が良いと私も思っています。

思うに、運というものは我々の前をグルグルと回っているもので、そこに手を出すか出さないかという判断じゃないのかと。そしてその運は人が運んでくるものかなと思つているんです。

栄一の人生を見ると、いろいろな人と会っているんですよ。晩年になつても出勤前に陳情に来る人と会つたりしている。会社の重役から学生まで、たくさん会っています。

そういう意味では、人と話すのが好きだったのかもしれないね。私の父や叔父を見ていても、みんなしゃべり好きです(笑)。

村上 渋沢家には、家訓のようなものを見ることがあります。ただ、本当の意味で楽しさを感じるには、多少苦しいこと、辛いことを乗り越えることが必要です。やはり仕事は、「楽しむ」というところまでいかないと、本物じゃないのかなと思う。現役を終えて、自分の人生の研究テーマに取り組んでいるいま、そういう境地に、だんだん近づいてきたなと思います。

### 天に貯金する投資

渋澤 実は去年、コモンス30ファンドという新しい投資信託を始めるために、新しく会社を立ち上げました。

村上 それはどういうファンドですか。

渋澤 「コモンス」はコモン・グラウンド(共通地)から来ている言葉で、五、六年くらい前から考えてきたことです。

実はこれ、村上先生の考えに影響を受けているんですよ。

村上 え、どういふ点で？

ものがありますか？

渋澤 あるんです。実はそれが私の栄一の研究をするきっかけとなりました。

二〇〇一年に自分の会社(投資関係)を立ち上げようと思った時に、昔、叔父が、「渋沢家には昔からの家訓があつて、そこに株と政治はやってはいけないと書いてあるらしい」と言っていたのを思い出して調べてみたんです。

村上 え、株式会社の親玉が、株をしちゃいけないって？

渋澤 はい。それで渋沢家に残る講演録や著書を調べてみたら、「投機ノ業又ハ道徳上賤ムヘキ務ニ従事スヘカラス」

という一文が出てきました。私は別に投資を賤しい仕事とは思っていないけれども、安く買つて高く売り抜けるというのは、確かに投機だよな、と(笑)。ゴア元米副大統領が「不都合な真実」という本を出しましたが、これは「渋澤健の不都合な真実」だなと思ひまして(笑)。

ただこれだけたくさん資料があれば、私に都合がいい言葉も入っているかもしれないと思つて、他の方が書いた渋沢栄一の本では

なく、実際に栄一が残した言葉を調べてみようと思つたわけです。

### 親は子供が 楽しんでる顔を見たい

村上 調べてみて、どんなことを感じましたか。

渋澤 栄一は私が生まれる三十年前に亡くなりましたから、三十年前の祖先との対話を楽しむような感じでした。

そういう意味では、栄一は五百もの会社の設立に携わってきましたが、お金も会社も残しませんでした。しかし言葉だけはたくさん残してくれた。それはよかったなと思ひます。

村上 お金はいくらあつたって、ちゃんとした人が継がないと百年も持たない。その代わり、言葉は後世にまで残りますからね。孔子の言葉だつて『論語』として二千年五百年も生きています。

渋澤 栄一の著作の中で『論語講義』という本があるんですが、その中で一番気に入っているのが、「これを知る者はこれを好む者にしかず、これを好む者はこれを樂む者にしかず」

です。栄一の解釈によると、知

ることは大前提で大切だけど、知るだけでは行動に移らない。好きなら行動には移せるが、でも好きだけなら壁にぶつかつて挫折するかもしれない。だが楽しい心を持つてば、壁にぶつかつても常に前に進むことができる——まさに人生は自分が楽しむためにあるということを書いていきます。

「知る」や「好き」は一人でできる行動だけれど、「楽しい」は一人では取まらず、必ず他に影響を及ぼしますよね。楽しんでるにしている人のところへ、「何やっているの?」って人が寄ってきますから。

村上先生もそうですが、成功される方にお会いすると、人生を楽しんでおられるなという感じを受けます。おそろくそういう人たちは成功したから楽しそうなのではなく、もともと楽しむ心を持っていたから成功したと思ひています。

村上 私が言っているサムシング・グレートとは、全人類全宇宙の親みたいなものだからね。そう考へると親の楽しみは、子供が塾に行つてマジメな顔して勉強している姿じゃなくて、子供が本当に生き生きと喜んで、楽しんでる姿

渋澤 いま「投資」というと、企業の財務諸表、土地など目に見える資産データを対象に行われているわけですね。しかし、我々は企業のDNAに投資しようとする。要するに企業理念や社風、そこで働く人たちの情熱といった「見えない資産」も重視して、三十年の目線で長期投資を行おうということですね。

村上 投資で三十年!?



### 国を興すのは民間の力 元氣振興の急務

村上 最後に、現代人に対する栄一さんからのメッセージをまとめるとどういふものになりますか。  
渋澤 一言で言うなら「元氣になれ」ということですかね。それとイコールの意味で、「人任せにするな。政府任せにするな」ということでしょうか。やはり栄一のライフワークは民間力で国を興すということだと思えます。  
村上 渋沢栄一さんはいま盛んにいわれている「官から民へ」を先

のはそんな短期的につくるものではなく、中長期的な事業活動によって醸成されていくものじゃないかと思えます。だからいま現在の取り組みを見て、三十年後も成長しているであろう企業銘柄を厳選し、投資することで企業活動を応援していきま。

村上 しかし、目に見えない価値をどう評価するんですか。

渋澤 例え「この会社には笑顔がある」というのも一つの見えな資産だと思えます。

村上 なるほど。

渋澤 初めて投資信託を検討する人や学生の方でもやりやすいように、月々三千元からの積み立てプランもあります。大金を一度にドーンと投資するのではなく、毎月植木に水をあげるような感覚で積み立てていく。若い人であれば、自分の子供のために毎月積み立ててあげるとか、高齢の方であれば自分の孫のために積み立ててあげるといふことです。

三十年後、もしかしたら自分はいないかもしれないけど、誰か自分の大切に思っている人が元気で、幸せに暮らしてほしいなという思いは、日本人でもアメリカ人でも

取り上げていたわけだ。

渋澤 はい。私が栄一の研究をして意外だったのは、『論語と算盤』の著書に代表されるように、道徳と経済の合一、いわば「やさしい資本主義」といったイメージだったんですね。しかし、実はそうじゃない。

例え「元氣振興の急務」という中に、

「其の日くを無事に過ぎればすればそれでよいといふ傾向のあるのは、国家社会に取つて最も痛嘆すべき現象ではあるまいか」  
「今より四、五十年前、すなわち

(明治) 維新前後における人々の活動に比するに、その元氣において実に天地の差がある」

といった言葉が出てくる。これなど、維新を「戦後」や「昭和」と置き換えれば、そのまま現代への警句としても通用します。

村上 本当だ。

渋澤 たぶんその頃は日露戦争が終わって、日本が豊かな時代だったと思うんです。それで気づいたら、一人ひとりがあまり国のことを考えないで、政府任せになっていた。しかし、世界を肩渡せば様々な動乱が渦巻いている。

共通しているはず。それを「コモン・バリュー(共通の価値)」と呼んでいるのです。

村上 いま誰しも世の中が行き詰まっているなと感じていると思うんです。しかし、それは百年に一度の経済危機じゃなくて、もっとも大きな文明史、特に西洋が力とお金と軍事でもって世界を席巻してきた時代の転換点に立っている気がしません。

そういう時に健さんのような投資家が出てきて、DNAを重視した投資とか、目に見えないものを大切に経営ということを言い出した。宗教や道徳の世界じゃなく、利を求め経営という世界、投資の世界に出てきたのは素晴らしいことだと思います。

渋澤 いままであった投資を否定しているわけじゃなくて、それにプラスして企業の魂やDNAという、見えない資産も大事だよねと。栄一の著書に『論語と算盤』がありますが、いままでの投資は算盤だけの世界だったと思うんです。

村上 渋沢栄一さんのすごいところはその両方を兼ね備え、しかもそれがいい方向に相互作用させたということですね。『論語』を理解

また、「大正維新の覚悟」という講話の中で、  
「今日の状態で経過すれば、国家の前途に対し、大いに愁うべき結果を生ぜぬとも限らぬ」と言っていて、未来に対する危機を述べていますが、実際に栄一が亡くなった昭和六年前後から日本は暗黒の時代へ突入していききました。歴史は繰り返すといいますが、

確かに一人では何もできないんだけれども、一人ひとりが意識を持たないと、気づいたらとんでもない方向に行ってしまう可能性もあると思うんです。

村上 その一人ひとりをまとめていくというか、引っ張っていきけるリーダーの出現が必要ですね。しかしそれはどうやって出てくるのか問題です。政治の世界から出てくるのか、渋沢栄一さんのように経営の世界から出てくるのか、あるいはまったく違う分野から出てくるのか。……まあ、学者ではないかな(笑)。  
最後に、渋沢栄一さんは語録を見ると「天命」とか「天に従う」という言葉が時々出てきますよね。目には見えないが顕然と存在する何か大きなものを感じておられた

するために経営的なものが役立つ。その両面を備えていたところが素晴らしい。

みんなこのままではダメだなと感じていると思うんですよ。科学技術だけでは幸せになれない。しかし、そうかといって科学技術を離れてはもはや現代社会の生活は成り立たない。

そういう時に渋沢栄一さんの子孫が魂とか命とか、目に見えない資産を重視した投資を始められた。これはまさに渋沢栄一「論語と算盤」の現代バージョンですよ。

渋澤 お客様からいただく、我々の報酬の一部は社会活動に寄付します。私は寄付というものは超長期投資だと考えているんですね。自分には返ってこないけれど、次世代に返ってくる投資。そういう構想を考えていた時にちょうど先生の著書を見たら、「天に貯金する」とあった。ああ、同じことをおっしゃっているなと思ったんですよ。

村上 それは私の座右の銘です。いや、しかしこの三十年先を見たコモンズファンド、おもしろいと思います。私もこの投資を始め、あと三十年長生きして成果を見届けようかな(笑)。

渋澤 そうですね、サムシング・グレートとは言わなかったけれども(笑)、天とか天命というものを感じていたことは確かだと思います。そしてそれらは人が決めるのではなく、四季のように常に流れていくものだというようなことを言っています。

だから素直な心でちゃんと生活していれば、それぞれが天命に恵まれると。そういう思いがあったからこそ、「真正の利殖は仁義道徳に基づかなければ、決して永続するものではない」といって、仁義や道徳によらなければ、本当の富を永続させることはできないと言ったのでしよう。これは栄一の実感だったと思います。  
村上 渋沢栄一さんの言葉は、時代を経てもまったく古くないですよ。いまこそ「道徳と経済」を一致させて、日本を真に豊かな国にしていかなければと思えます。  
渋澤 はい。栄一の思想の現代的意義をとらえ、いまの時代にいかに応用していくかを考えることが、子孫である私の一つの役目ではないかと思っています。